

日本遺産

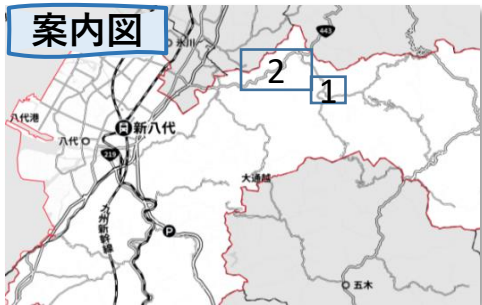
八代を創造した石工たちの軌跡

～石工の郷に息づく石造りのレガシー～

# 泉町の石橋群 (いずみのめがね橋)

八代市にある石橋や干拓樋門など、石造りの文化を構成する文化財が令和2年6月、「日本遺産」に認定されました。八代の地に今なお残る、卓越した技術で築かれた遺産の数々。その中から、泉町に残る石橋を一挙まとめて紹介します。（「泉支所だより」（令和3年5月号～令和4年4月号）に掲載した記事から一部抜粋、加筆修正し編集しています。）

## 案内図

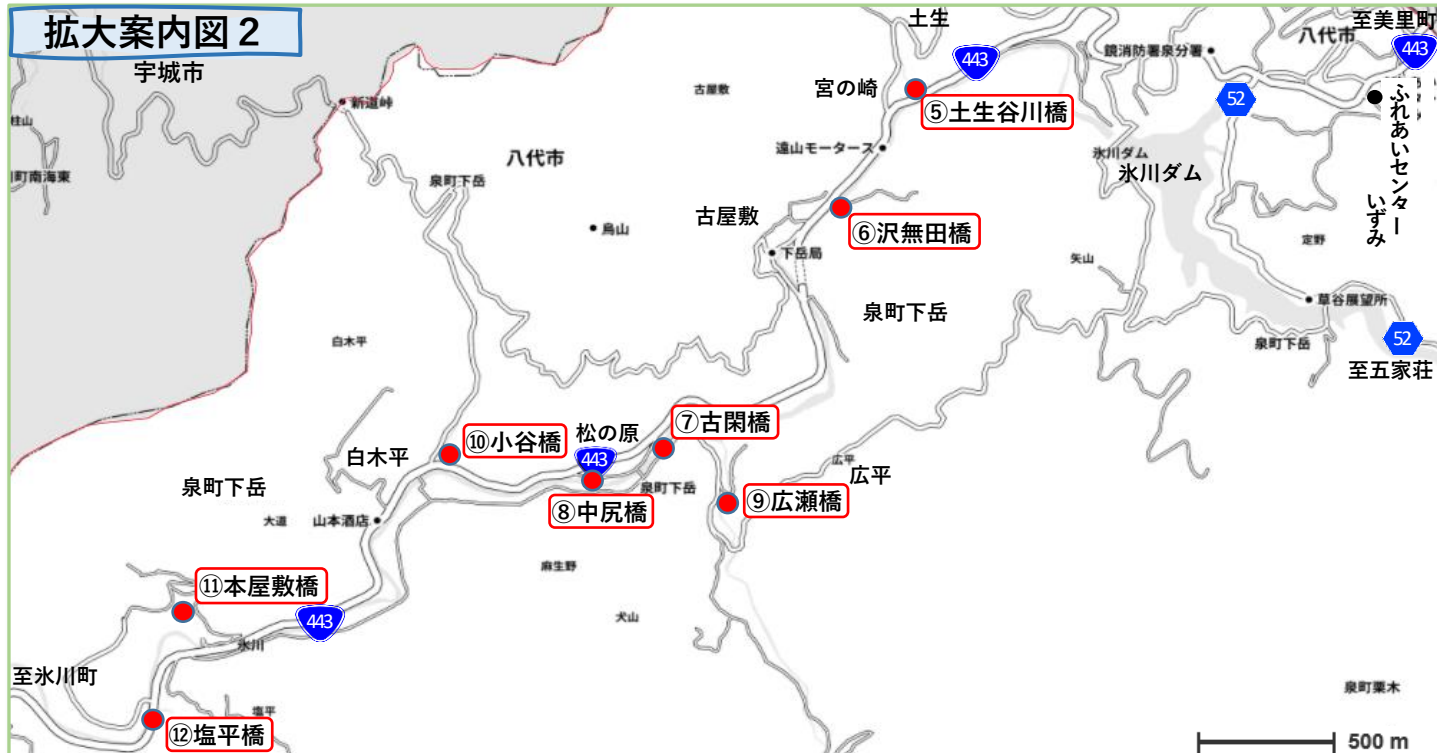


## 拡大案内図 1



- |        |       |
|--------|-------|
| ①落合橋   | ⑦古閑橋  |
| ②たけのこ橋 | ⑧中尻橋  |
| ③高原橋   | ⑨広瀬橋  |
| ④糸原橋   | ⑩小谷橋  |
| ⑤土生谷川橋 | ⑪本屋敷橋 |

## 拡大案内図 2



## ①落合橋（おちあいばし）

【落合橋】1847年架設という。橋長20m、橋幅4.6m、径間15m。

泉コミセン（旧泉第2小学校）横の氷川に架かる、県道久連子落合線の現役橋梁。下流側の歩道橋から石造りの構造を間近に見ることができる。旧栗木村の入り口にあたり、地元栗木の野添産出の赤肌色の石材使用。

（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊、「泉村誌」）



泉コミュニティセンターから撮影

## ②たけのこ橋（たけのこばし）

【たけのこ橋】昭和初期の架設という。橋長18.4m、橋幅3.2m、橋高7.7m、径間12.4m。乙川地区の栗木川に架かる。県道久連子落合線の新しいコンクリート製アーチ橋「竹の子橋」と並んで架かっており、現在、歩道橋として利用されている。落合橋と同じく地元野添産出の石材使用。（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊）



県道「竹の子橋」から撮影

## ③高原橋（たこらばし）

【高原橋】明治35年の架設。橋長15.0m、橋幅2.15m、橋高5m、径間11.9m。深山谷の高原山法泉寺（たこらさんほうせんじ）への参詣橋として、すぐそばを流れる栗木川に架かる。大正時代、現在の県道久連子落合線の整備により使用されなくなったが、当時の姿をよく残す。橋の傍に立つ碑に、種山石工の田上甚太郎の名前を見ることができる。石材は地元産の野添石使用。（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊）



栗木川上流側から撮影

## ④糸原橋（いとばるばし）

【糸原橋】江戸末期の架設。橋長6.8m、橋幅2.1m、径間4.12m。泉小中学校を左手に見ながら糸原に向け市道を1kmほど登って行く。最初のヘアピンのコンクリート橋から糸原川を下流側に見下ろすと、今は使われていない古道の石橋が木立の中にひっそりと垣間見える。藪をかき分け川原までおりて行くと、今は渡る人となが、その端正な姿に往時が偲ばれる。（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊）



氷川支流 糸原川 下流側から撮影

## ⑤土生谷川橋（つちばえたにがわばし）

【土生谷川橋】架設年、橋長、橋幅等不詳。旧泉第一小学校入口の坂道のためと、土生谷川に架かる。国道443号に新しくコンクリート橋が並行して架けられ、現在は歩道として利用。一見、石橋とは気付きにくい。一旦国道脇から階段を氷川までおりて国道橋の下を潜り見上げると、橋の表面がコンクリートと鋼板で補強され石組みは見ることにはできないが、美しいアーチに本体の石橋の面影がうかがえる。（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊）



氷川支流土生谷川 下流側から撮影

## ⑥沢無田橋（さわむたばし）

【沢無田橋】橋長20.4m、橋幅3.5m、径間18.3m、明治10年架設。下岳神社下の氷川本流に架かる。市道沢無田線の現役橋梁で、国道443号と沢無田地区を結ぶ。泉町では2番目に長い石橋で、橋名板を見ると昭和34年11月20日の記載があり、当時石橋の橋梁上部、高欄部等をコンクリートで補強したことが窺える。橋梁下部には、緩やかなアーチを描く当初の石組を見ることができる。（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊）



氷川下流側から撮影

## ⑦古閑橋（こがばし）

【古閑橋】橋長25.8m、橋幅3.3m、径間19.9m。架設時期不詳。松の原地区の氷川本流に架かる市道犬山支線の現役橋梁で、泉支所の橋梁台帳では「松の原橋」、「めがね橋」とも。泉町では最も長い石橋で、昭和43年に橋全体がコンクリートで補強されたことが近くの改修記念碑からうかがえる。コンクリートで覆われたことにより石橋の石組は確認できないが、きれいなアーチに架設当初の姿が思い浮かぶ。（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊）



氷川下流側から撮影

## ⑧中尻橋（なかじりばし）

【中尻橋】橋長5m、橋幅5m、径間3.6m、大正末期架設。八代方面から国道443号を泉町の松の原地区の入口で旧県道（現市道松の原線）に分岐してすぐ、氷川に注ぐ小さな谷川を跨ぐ橋梁である。完全にコンクリートで覆われており、残念ながら石組は見ることにはできない。谷川に降りてアーチをくぐってみたが、ここに石橋が内蔵されているとは思ってもよらない。（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊）



氷川側から撮影

### ⑨広瀬橋（ひろせばし）

【広瀬橋】橋長13.1m、橋幅3.1m、径間10.4m、江戸末期架設。「広平橋」とも。松の原から氷川を渡り広平への途中、市道から下岳農免道に左折分岐してすぐ、農道受場橋に並行して氷川支流水無谷川の上流側に架かる。アーチの裏側からは石組を間近に観察できるが、側面は雑木などが根を張り繁茂する枝葉で判然としない。伐採除草など手入れした元来の美しい姿も見てみたいところ。（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊）



水無谷川下流側から撮影

### ⑩小谷橋（こたにばし）

【小谷橋】橋長7.8m、橋幅2.75m、径間5.66m、幕末～明治初期架設。宮原方面から国道443号を氷川に沿って進むと、国道橋白木平橋のたもとの商店の裏側にある。国道を白木平橋の手前から左折し、宇城市へ抜ける市道泉小川線に入り、すぐ右下に目をやると商店の裏手の氷川支流肥賀志谷川にひっそりと架かっているのが見える。市道からは橋まで草木が茂り容易に近づけない。（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊、「泉村誌」）



肥賀志谷川下流側から撮影

### ⑪本屋敷橋（もとやしきばし）

【本屋敷橋】橋長5m、橋幅2.2m、径間2.76m、架設年不詳。宮原方面から国道443号を進み泉町に入るとすぐに左手にJA茶業センター、そして氷川越しに建設会社のアパートが見える。国道の大道橋を渡りすぐに左折してアパート裏から里道を100m程行くと左手の本屋敷谷川に架かる苔むした本屋敷橋が目映る。往時の端正な姿そのままに木立の中にひっそりと佇んでいる。（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊）



本屋敷谷川下流側から撮影

### ⑫塩平橋（しおだいらばし）

【塩平橋】橋長5.5m、橋幅3.9m、径間3.6m、大正初期頃の架設。国道443号を氷川沿いに進み泉町に入る目印になるのが森林組合の案内看板と氷川に架かる県道本屋敷橋。そのすぐ手前で国道が氷川に注ぐ小さな谷川を跨いでいるのが「塩平橋」。そこに石橋があるとは思ってもよらないが、近づいて見てみると、国道を新「塩平橋」と一体となって陰で支える縁の下の力持ちの姿がそこにある。（参考文献：上塚尚孝著「熊本の目鑑橋345」熊本日日新聞社刊、「泉村誌」）



塩平谷川上流側から撮影